

IASL2016東京大会 ボランティア参加リポート

同志社大学大学院総合政策科学研究科 博士課程前期2年 稲田 真理子

昨夏、東京でIASL（国際学校図書館協会）2016年度の年次大会が8月22日から26日の5日間にわたって開催された。「A SCHOOL LIBRARY BUILT FOR DIGITAL AGE（デジタル世代の学校図書館）」をテーマとした本大会は、世界30ヶ国から300人以上の参加者を迎え、デジタル環境が一般的となった現代の学校図書館をどのようにデザインしていくべきか、また学校図書館員や生徒はその流れをどのように捉え、評価しているのか、各国からリアルタイムな報告がなされた。いわば未来志向型の学校図書館像を具体的にイメージできる得難い機会となった。

同志社大学院生としてボランティア枠で大会に参加できる厚遇を得たため、後進に簡単に記録して残したいと思う。同志社大学からは木村彩乃さん、ほかに会場である明治大学、教員養成で有名な明星大学、国際化に力を入れている大東文化大学等から約40名の学部生がボランティアで参加しており、会場受付、発表セッション、フロア案内、学校視察への同行と、生き生き元気に立ち働いて終始活気に満ち溢れた大会となった。

1. きっかけはGiggleIT

大会に先立つ5月、IASL会長のディジット・シン教授が来日、同志社大学図書館司書課程にて講演された。学校図書館の役割には、読書指導や授業サポート、生徒の心の居場所等さまざまあるが、シン会長はとくに学校図書館の横の繋がり強化と国際的に視野を広げる取り組みとしてIASLの“GiggleIT” (<http://www.iasl-online.org/advocacy/giggleit>) を紹介された。“giggle”とは、「クスクス笑う」の意であるが、GiggleITとは即ち、「it（それ）」を面白く思うこと、「IT（Information Technology）」を用いて楽しい試みをしようということ、二つの意を掛けているものと思われる。具体的には、世界の学校図書館が参加して、生徒が創作したイラストや詩、文章（物語やジョーク小話、身近なエッセイなど）をGiggleITサイトに登録、共有し、読みあうことで、互いの国についての知識や理解を深めようとする試みである。現在登録されている作品は小学生の創作物が主で数も多くはないが、さまざまな国の学校図書館が紹介されてい

て興味深い。同サイトは毎年1つのテーマを定めて創作物を募集するようであるが、文化的背景によって異なる重心の作品が寄せられるものと考えられ、このような取組が活性化すれば、将来的には学校図書館のPCを介して（英語圏ばかりではない）各国の生徒が繋がって互いの状況を知ったり、情報交換したり、より身近な形で生きた外国の情報を得ることが出来るようになるものと思われる。学校図書館で国際人としての一步を踏み出すことが当たり前になる時代が来るのかもしれない。シン会長の話は学校図書館の未来について大きな示唆を与えるもので、ワクワクさせるものであった。

この講演会においてIASL東京大会が開催されることが案内され、否が応にも興味をかき立てられた。国際会議であり、公用語が英語であることから、日常全く英語で会話する機会をもたない自分にどれほど理解が至るのか不安があったが、これも経験と気楽に参加することにした。世界各国の学校図書館で行われているデジタル世代プロジェクトへの好奇心が気後れを凌駕したといえる（しかし実際、各国の大会参加者は非常に熱心な研究者であり、日本での情報交換を楽しみに来られていた。期待に応えられる語学力がないのは残念なことであり、英会話力を磨いておくにしくはない）。

2. 大会の様子

大会前日の21日、キックオフミーティングとして、「Going Global with the IFLA: Resources and Best Practices for Implementing the New Guidelines」と題されたプレカンファレンスが開催された。前年にIASL新ガイドラインを上梓したばかりのダイアン・オバーク教授とバーバラ・A. シュルツ＝ジョーンズ准教授、レスリー・ファーマー教授、カレン・W. ガビガン准教授ら執筆者自らが参加して開催される贅沢なワークショップで、実はこれを大変楽しみにしていた。しかし、キックオフミーティングだけあって交流メインの会であり、簡単な概説の後には少人数のグループに分かれ自己紹介、参加者は主に日本の学校図書館の様子を聞いたが、同じグループの日本人参加者が日本の学校図書館の先進的な取組を紹介したが、このような場で一部の先進的な学校の取組を紹介すると、海外においては一般的な日本の学校図書館がすべてそのような存在であると伝わってしまうのではないかと気が気ではなかった。もちろん日本の良い事例を紹介することは大事である。が、抱える問題の共有も等閑にはできないように思う。語学力があれば、補足したり、誤解が生じていないか確認したりすることができたのにと反省することばかりであった。

大会期間中は、ボランティアとしての活動が主で忙しく立ち働いたが、ボランティアであっても希望するセッションがあればあらかじめ申請し、交替で幾つか聴講することができた。海外からの参加者、講演者の先生方は非常にフレンドリーで、積極的に交流

を図ろうとされており、投げかけられた質問にはいつ何時も丁寧に答えられた。そういった点からも多くの知見を得ることができる得難い機会であった。このような参加者のホスピタリティ向上の面から考えれば(必要ないと思われても)ボランティアの通訳をもっと多く配置できていれば尚実り多いものになったようにも思われた。

3. ポスターセッションとツアー

23日、ポスターセッションが行われている部屋に入ると女子高生たちに取り囲まれた。彼女たちは茨城県立水戸第二高等学校の図書委員である。水戸二高では勝山万里子学校司書を中心に図書委員(生徒)に図書館教育を施し、生徒と学校が一体となった学校図書館づくりを行っている。今回の大会参加も研修の一環とか。高校生自らが今回のように国際会議に参加して、自分たちの学校生活や学校図書館活動について英語でプレゼンするのは非常に意義深い活動のように思われた。海外の参加者にも好評のようであった。

24日には、都内や千葉、横浜の学校図書館を訪問するツアーが6コース実施され、ボランティア学生も同行した。私は横浜市立盲学校と関東学院小学校を訪問するツアーに参加した。

盲学校には「盲」もしくは「準盲(視力が0.03以下の弱視のこと)」の生徒が通う。幼稚部～高等部普通科、及びあんま・はり灸マッサージ師を目指す専攻科があり、幼児から60歳までの幅広い年齢層の生徒が学んでいる。盲学校にももちろん学校図書館があり、手で読む絵本から医学書、視覚障害教育関連まで蔵書が1万5千冊ほども取り揃えられていた。居心地よく整えられた館内には、点訳本や大活字本、CDなどの録音図書、拡大読書機、マルチメディア DAISY などが揃えられ、障害があっても情報から隔てられないようにさまざまな配慮がなされている。リクエストのあった資料を点訳、音訳するために500名を超えるボランティアが登録されているという。高等部の教室を見学すると、拡大機がある机とモニターが設置されている机があった。教科書を拡大して読む生徒と、デジタル教科書を利用する生徒がいるようだ。教科書は拡大本を作ることでもできるが、1冊4万～12万程度もかかり、おまけに1冊が何冊にも増えて嵩張るため使い勝手がよくない。デジタル教科書も費用の面でまだ負担は大きいですが、拡大やハイライト、読み上げ機能などもあり、有望なツールということである。デジタル環境は障害の程度を問わず有効な情報提供ツールとなる。学校教育に導入するにあたっては多様な使い道を想定し、メディアの管理者たる学校図書館員は常にデジタル環境、機器、資料に関する知識を更新していくように配慮しなければならないように思えた。

4. セッションについて

デジタル世代に入った学校図書館をどのようにリデザインしていくか、各国が大きな関心を持って受け止め、プロジェクトを展開させているように感じられた。世界中の教育機関が、生徒がデジタル環境によって学びを深めることが可能と確信しているように思われる。

ポルトガルのエルサ・コンデ女史の報告によれば、ポルトガルは20年にわたって SLNP（学校図書館ネットワークプログラム）を実施しており、2450ある初等・中等教育学校の学校図書館のスペースと機能の再編を進めてきた。学校図書館はすでに単にコレクションにアクセスするだけの物理的なスペースとは捉えられておらず、デジタルライブラリ、Web OPAC、バーチャルリファレンスサービス、オンラインデータベース、インターネットポータル、eラーニングプラットフォーム、ブログ、ソーシャルネットワークとその他のキュレーターシップ web2.0サービス等、さまざまな新しいインフラや技術を活用して今日的な学校図書館の風景を構成すべきと考えられている。企業とのパートナーシップを通じて、電子図書館や e-Book 等、有料のデジタルソリューションを生徒が利用可能にする重要性にも言及された。

アメリカ合衆国のデビッド・ローチャー教授とブランチ・ウォールズ名誉教授は、学校図書館を学生自身が共同して問題解決に当たるオープンスペース「ラーニング・コモンズ」とすることを推奨した。また、オンラインで学校全体がつながるデジタル学習コミュニティ VLC (Virtual Learning Commons) を提案、簡単にプラットフォームを立ち上げることが可能なテンプレートをネット上で公開 (<https://sites.google.com/site/templatevlchigh/>) しており、解説を加えた。

ヴィルジーリオ・G. メディナ Jr 司書とロス・トッド教授は、インターネットの利用に伴うオンラインリスクに言及し、カタールの先進的な教育を行う学校において5-10学年の生徒がどの程度自分のインターネットスキルに自信を持っているか、23のチェック項目を用いて調査した。また、彼らが良いオンライン学習者となるために学校図書館ができることは何かを質問調査し、知的財産の利用、情報の整理と分析、インターネットの安全性、デジタルリーディング、および将来的な研究プロセスについての情報提供などが要請されたと報告した。

ほかにもさまざまな意欲的な研究発表や講演があったと聞いている。私が参加したのは全5日の大会日程のうち3日ほどであったが、知的関心を揺さぶられる毎日であり、朝から晩まで駆け回っていた印象である。しかしながら大会の裏方一切を取り仕切った明治大学の三浦太郎准教授のご活躍には当然ながら到底及ぶべくもなく、そのほか大会日程を通じて、森田盛行 SLA 理事長、稲井達也教授、明星大学の大岩祐也君、その他

数多くの皆様にお世話になりました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

今後、日本の学校図書館においても益々のデジタル化が進行するものと考えられるが、日本において先進的な取り組みの意欲に満ちた一部の学校図書館は別格として、一般的な公立の学校図書館の現実との格差は大きく、デジタル環境の整備、学校図書館員の配置やその能力の向上、予算、情報資源の整備等、抱える問題は数えきれない。本大会がこのような閉塞的状况から一挙に脱するための大きな知見の湧泉となり、学校図書館が本質的な意味で学校教育に欠かせない環境を整備し、生徒たちの足音が絶えない面白い場所として生まれ変わることを願ってやまない。